

空から眺めたこの町で 見つけた新たな使命～ 積丹町地域おこし協力隊員 窪田 伶人の挑戦



窪田 伶人 (くぼた れいと)

群馬県高崎市出身。元海上自衛隊P-1 航空士。現在は株式会社 SHAKOTAN GO所属の地域おこし協力隊。2023年6月入社以来、岬の湯しゃこたんの温浴事業統括から新規事業立ち上げ、メディア出演やプロモーションまで幅広く行う。「温泉から始まる町おこし」を掲げてさまざまな地域イベントも企画。

2023年11月「100年先も人財が残る町づくり」をミッションに baobao 合同会社を設立。岬の湯しゃこたんの副支配人としての傍ら、会社経営も行う30歳の挑戦者。

【自衛隊から地域おこし協力隊へ】

私は約2年前まで海上自衛隊の航空機「P-1」という哨戒機しょうかいきに乗り、日本を空から防衛するためのミッションを行っていました。飛行機という特殊な環境下で働けることは、私自身一定の達成感がありつつも、コロナ禍を経て自身のライフスタイルに対する価値観の変化を感じ、28歳で自衛隊を退職。新たな挑戦の場として、地域おこし協力隊に応募しました。

【積丹町の協力隊制度について】

通常、協力隊と聞いて真っ先に浮かぶのは、各自治体に属したうえで何らかの活動を行っていることが多いかと思います。積丹町には企業や団体へ属したうえでの協力隊の活動があり、地域協力活動を行う受入団体に対して、町が委託することで協力隊としての活動を行っています。

【なぜ協力隊に】

正直、協力隊という言葉の存在は知っていましたが、自分がその役割を担うことになるとは思いませんでした。私の場合、自衛隊から転職してベンチャー企業に入ることを目的としていました。自分で裁量を持った働き方ができることを重要視していたからです。そのため当初から協力隊になることを目的としていた訳ではありませんでした。しかし今では自身の活動を通して積丹の魅力を発信し、町の発展に寄与できればと考えています。また、企業委嘱型としての協力隊の制度を地域のためにより良く活用すべきだと感じています。

【なぜ積丹町を選んだのか】

そもそも転職の選択肢としては、首都圏の企業をリサーチしていました。とあることがきっかけで、積丹町に設立してまだ2年目の企業が、経営破綻した温泉の再生化を担っていることを知り、話を聞いてみたくなりました。それがきっかけで実際に積丹町に行って



自衛隊での初飛行訓練修了後の写真 (H29年)

みることに。ただ、訪れたのが1月だったのでそれはもう大変な環境でした。吹雪で目の前はホワイトアウトし、屋外はおろか、お店の中さえも誰もいない。そんな場所でまさか自分が生活することになるとは思いもよりませんでした。当時の自分はなぜだかそれが面白いと感じていました。なぜなら、このような環境下でこそ、自身の真価が問われると考えたからです。

積丹町を選んだ理由は、他にもあります。私は仕事柄いつも空から日本列島を眺めているなかで、半島や離島の景観と、そこで生活する人々に興味がありました。私自身は首都圏での生活が大半でしたので、その真逆な環境で生活している人々が一体どんな生活をしているのか。こればかりは住んでみないと分からないことだったので、積丹町への移住を決めました。

【困ったこと】

住んでみて大変だったのは、冬の生活です。私は群馬県出身ですが、雪の少ない地域だったため道路がホワイトアウトするような経験も初めてのことでした。ただ住んでみて分かったことは、温もりを感じられるような人間関係と、都会にはない、圧倒的な自然景観でした。この環境こそ、今までの自分にはなかった経験や知恵、そしてあらゆる局面を打開していく柔軟な発想を持つことができると考えています。

【積丹半島の美しさと歴史文化】

積丹半島は、その美しい海岸線と透明度の高い「積丹ブルー」と呼ばれる海で知られています。断崖絶壁が続く海岸には、^{かわい}神威岬や積丹岬などの絶景スポットがあり、海域公園地区にも指定されています。

文化面では、かつてのニシン漁で栄えた歴史があり、今でも新鮮な海産物、特にウニが名物です。また、積丹ジンなどの地酒や、温泉施設も楽しめます。

【型にはまらない地域おこし協力隊の形】

私のように、積丹町には企業や団体委嘱型の協力隊員が十数名います。皆それぞれ属している事業団体が違えば、この町にたどり着いた経緯も違います。協力隊を自己実現の場としている人から、地域のために活動している人も含め、一緒くたに協力隊として町から見られるため、あらゆる側面で活躍を期待されていると感じてしまい、精神的負荷を生じてしまう人も。地域おこしという名前にとらわれてしまったりは、本来の自分の姿を見失ってしまいます。私はそれぞれが思う協力隊の在り方を見つけていくことこそ、自分の町で生きていく鍵になると考えています。協力隊の誰もが自分の町を好きになり、自ら発信したくなる。またその活動を受け入れてくれる地元の人々がいる、そんな優しい社会を広げていくことが、私の協力隊としての在り方です。



昨年3回目となるしゃこたんの新たなお祭り「祭の音2024」実行委員会の一員として成功に導いた